

第13章 オーストリア＝ハンガリー帝国の遺産

教会が大きな影響力を持っていた時期の革命の特徴は、クリュニー修道院の修道士、教皇、「母なる教会 Mother Church」の保護を受けた托鉢修道士の3者が、いずれも諦めることを知っていたことである。彼らの存在が教会分裂を防ぐのを可能にしていた。彼らこそがヨーロッパの良き伝統であった。クリュニー修道院のオディロ、ヒルデブランド（のちのグレゴリウス7世）、アッシジの聖フランチェスコらは、全員が修道士であったことも特徴として指摘できる。宗教改革でこの修道士に取って代わったのが、世俗国家の登場を予言したルターであった。彼は修道院を去って還俗し、修道女と結婚した。彼が採用した原則は「家父長主義 paternalism」であった。国家に於いても家庭に於いても、彼はこの原則を貫いた。このルターのやり方を引き継いだのが、クロムエル、ワシントン、ナポレオン、レーニンであった。彼らは全員が「田舎貴族 country gentleman」の出身であった。このようにヨーロッパの革命の指導者は、前半が修道士、後半が「田舎貴族」であった。人間のタイプとしては違っていたが、彼らが担っていた使命は同じであった。それに後半の世俗タイプの指導者は、修道士タイプの指導者が達成した成果を否定した訳ではない。むしろ、その成果を利用して、またルターの宗教改革によって、修道士タイプの指導者がいなくなった訳でもなかった。「教皇革命」の後に続く4つの革命（ドイツ革命・イギリス革命・フランス革命・ロシア革命）はカトリック教会・教皇・修道院を否定・攻撃していたが、それでもこの3つの宗教的な要素がヨーロッパ世界から消え去ることは無かった。

教皇による絶対主義体制を採用した教皇庁は、ユリウス Julius2世が第2のカエサル（『ガリア戦記』を書いた異教徒ユリウス・カエサル）を演じる決意を固めた時、徹底して世俗的な政策を採用することにした。この「世俗化を徹底した教会 the purified Church」を守っていたのが、イエズス会士たちであった。その後400年間、カトリック教会は教皇絶対主義を掲げる教皇の中央集権的な支配を受けることになった。そんな教会も、フランス革命でイエズス会は解散を余儀なくされ、教皇もナポレオンに投獄されることになった。

しかし19世紀になると、カトリック教会は再び復権を果たすことになる。しかも、かつてないほど教皇に忠実な教会であった。フランスのソレム Solemes村にあったベネディクト修道院の「ソレム運動 the movement of Solemes」(1)によって、全ての教区で共通の「ラテン語によるミサと儀式 the Roman mass and liturgy」が導入されることになった。細部まで違わない、決まった礼拝のやり方が採用されたのである。グレゴリウス7世の時にハンブルク・ブレーメン大司教であったリーマル Liemar が嘆いたように、「司教は教皇の執事・召使いに成り下がってしまった The bishops are becoming the pope's stewards and bailiffs」のである。教皇による中央集権化は徹底され、いかなる組織も自らの判断で行動することが禁じられ、自主性の発揮はすべて排除された。世俗化の要請に晒され続けた神学は、自己防衛のために硬直化せざるを得なくなった。理性尊重と自然崇拜の時代に合わせて、教会は合理的で懐疑を容認する思想を求めるようになり（イエズス会士の書いたものを見よ!）、さらには効率よい統治に必要な権力を手に入れようとする様になった。今日のカトリック教会は、効率だけを追求する中央集権化された組織と化している。置かれている世界が理性と自然、組織と権力しか信じなく成っているからである。

カトリック教会が変化する環境に適応していく時のやり方は、時代によって違っていた。しかし、いずれもそれなりに理屈が通ったものであった。それは、特にヨーロッパ世界のことを考えたものではなかった。組織として生き残るための反応に過ぎなかったのである。そのやり方に格別驚くべき点はなかった。彼らは人間に関する知識に、何も新しいことは付け加えていなかったのである。しかしクリュニ

一修道院のオディロ、グレゴリウス7世、アッシジの聖フランチェスコの3者の場合、彼らがいなければ失われたものは大きかったはずである。その時と違って19世紀の教会は、先駆者であることを止めて「言い訳 apologetics」をするだけの存在と化していた。聖職者も単純な道義家と化し、正統派一辺倒で規律を重んじるだけであった。つまり、かつての目標は実現され、やるべきことが無くなってしまったのである。言い換えれば、新しく何かを生み出す必要が無くなってしまったのである。かつて教皇革命の時代に先駆者として革命を先導した教会が、いまでは世界の動きに合わせて行くだけの存在に成ってしまった。

こんな例を示すことができる。「第2の教皇革命」のときマリア信仰が重んじられ、ローマの教会は「母なる教会」とされたが、その底流にあったのは「母性崇拜 maternalism」であった。ところがルターによる宗教改革が始まると、「父性崇拜 paternalism」が台頭してきたのである。その時マリア信仰に代わって登場して来たのが、ヨセフス（イエスの養父）信仰であった。16世紀の初めに3月19日が聖ヨセフスの日とされ、彼の名前を冠した修道会が登場してきた。またヨセフスの善き父親ぶりが、世俗界の「父性崇拜」に対抗する教会にとって良い武器となった。1500年の「全贖宥の年 Jubilee」には（ユダヤ教に始まる50年ごとの贖罪の年で、カトリック教会には1300年にボニファチウス8世が導入する）、改めてヨセフス崇拝熱が高まっている。ただそれは象徴的な出来事であって、具体的に何かが変わったわけではない。

2千年の歴史を通して、カトリック教会は少しずつ変わってきた。マリア信仰がヨセフス信仰に取って代わられる際も、突然に変化が起きた訳ではなかった。そのことはカトリック教会の歴史家も証明している通りである。ヨセフス信仰がルターの宗教改革で登場して来た「父性崇拜」と同時進行であったことから判るとおり、ヨーロッパ世界の変化も継続性を重んじる形で起きていた。論理的な側面にのみ注目すれば、「母性崇拜」と「父性崇拜」は丸で火と水のように相容れないはずである。しかし、いずれも革命の結果として登場してきた原則であって、ともに必要なものであった。古い制度が革命によって終焉を迎えるとは言え、古い制度も積極的に新しい制度に席を譲るものなのである。マリア信仰がヨセフス信仰に取って代わられたことが、その良い例である。

ここ400年間、カトリック教会は世俗化の波に晒されてきた。しかし、それでも何億人もの信者が居ることも事実である。この「世俗化されたカトリック信者 Catholic laity」の存在こそが、カトリック教会の「存在理由 *raison d'être*」なのである。第一次世界大戦まで、神聖ローマ皇帝・教皇・ルネサンスの時代を一身に体現した大国がヨーロッパに存在していた。ハインリヒ2世（聖人に成った唯一人の皇帝）の帝国とオットー大帝時代の教皇領、そして聖イシュトバーン王 *Szent István király*（聖ステファン王）時代のハンガリーが再現された国オーストリア・ハンガリー帝国である。

オーストリア・ハンガリー帝国は、かつてヨーロッパ世界を構成していた全ての要素の集大成であった。この「国際的な国家 *Völkermonarchie, international nation*」は、存続が不可能としか思えない国家であったが、現実には存続していたのである。

19世紀のロマン主義を代表するシュレーゲル *Friedrich Schlegel* は、ウィーンで『調和 *Concordia*』と題する雑誌を創刊しているが（その名前から聖俗両世界の調和を願っていたことが判る）、そのとき彼が目指していたのは、オーストリアの「総合的な性格 *collective character*」を示すことであった。ハノーファー *Hannover* 出身でプロテスタントの彼が、カトリック教国であるオーストリアに忠誠を誓ったことから判るとおり、オーストリアは人類に貢献できる何かが備わっていた。シュレーゲルは生涯、「人類全体 *totality*」のことを考えていた。物事を考える時は徹底的に考えるべきであり、かつ個人的な利害ではなく人類全体のことを考えるべきなのである。「本物の理性 *true reason*」は何時でも何処で

も通用するはずで、党派的な意見は政治の世界では良しとされるかもしれないし忠誠心や勇敢さの現われとして評価されるかもしれないが、「真理の存続 the very existence of truth」のためにはならないのである。無意味な目的のために思想を捧げようとする勢力は、あまりにも多い。

こうしてシュレーゲルは党派的な勢力や「一国中心主義的な national」勢力が跋扈する中で、「学問の中立性 the universality of scholarship」を保とうと努力していた。19世紀のヨーロッパが学問的な成果を上げることができたのは、シュレーゲルのおかげであった。自然科学と社会科学の違いをはっきりさせたのも、シュレーゲルであった。人類の創造的な活動が続くことを予測したのも、シュレーゲルであった。また人類共通の財産を説明する場合と、同じ人類に属しながら「質的な違い qualitative variations」（国民性）を説明するための学問の違いを指摘して見せたのも、シュレーゲルであった。つまり彼は歴史研究にとって、人間が掛替えのない貴重な存在であると考えていたのである。シュレーゲルは同じ国民でも「新しい質 new qualities」（新しい国民性）を獲得することで変わりうること、突然変異が起きた様に変りうることを示して見せたのである。政治家としてシュレーゲルは、人間の特定の側面を認めざるを得ないことを知っていたが（たとえばフランス革命にも否定的な側面があることを認めていた）、思想家としては人間のあらゆる側面を考慮に入れるよう努力していた。

北ドイツのプロテスタントの家庭に生まれながら、フランス革命によるユダヤ人解放に影響されて結婚歴のあるユダヤ人女性とベルリンで結婚していた。ナポレオンが神聖ローマ帝国を解体したとき、シュレーゲルはパリで創刊した雑誌を『ヨーロッパ Europa』と題することにした。神聖ローマ帝国に代わる新しいヨーロッパの登場を願ってのことであった。その後、居をウィーンに移してカトリック教に改宗している。ウィーンでは『調和 Concordia』と題した雑誌を創刊したのだが、この雑誌が目指したのはグラチアヌス Johannes Gratianus が編纂した『お互いに矛盾する教会法を矛盾しない形で解釈すること Concordia discordantium canonicum』のように、対立する宗派・政党・国民のあいだに平和を取り戻すことであった。そして彼自身その人生で、違った文化の形や発展段階が相互に浸透しあった状態を体験済みであった。彼はヨーロッパ人として育つべく訓練を受けており（良心的かつ責任ある普遍主義者であった）、彼がウィーンに居を定めたのは、分裂・対立するヨーロッパでウィーン以外に逃げ場が無かったからであった。

そもそもオーストリアは 14 以上の民族が構成する国であって、近視眼的な「一国中心主義者 nationalist」からは、「近代ヨーロッパには相応しくない国の在り方 contresens dans l'Europe」だと考えられていた程であった (2)。チェコ人に民族意識を覚醒させた人物として知られているパラツキー František Palacký は次のようなことを言っていた。「もしオーストリアが存在していなかったら、それを作り出すしかなかったはずである If Austria did not exist, it would have to be invented」。彼にはオーストリアの「存在理由 raison d'être」が判っていた様である。オーストリアは、単なる 14 の民族の集まりではなかった (3)。オーストリア皇帝の称号を見れば、彼がヨーロッパ文明の全ての構成要素を象徴していたことがよく判る。まず彼は、使徒の権威を継ぐ皇帝として司教・大修道院長を任命していた。また、教皇選挙の結果を拒否する権限を有していたザクセン王朝時代の伝統も受け継いでいた。グレゴリウス 7 世の良き理解者でもあり、教皇の世俗的な権限や教会法に基づく権限の支持者でもあった。さらに托鉢修道会の支持者であり、皇帝でありながら自由都市トリエステの「独裁官 podesta」でもあった。伝統的にオーストリア本来の領土とされたところでは、有能な役人たちを統べる「最高顧問官 Hofrat」であったが、聖王イシュトバーンの王冠が貴族の強い権限を象徴するハンガリーでは、イギリスの「議会に権限を制約された国王 King in Parliament」に似た国王であった。19世紀には普通選挙権を臣民に認めて民主制への道を切り開いた皇帝であったが、被征服地に於いては戒厳令を公布できる

独裁者でもあった。

オーストリア皇帝は、かつてフランク族の国王が兵士たちに愛され尊敬されていた様にオーストリア軍の敬愛的であった。兵士は違った民族の出身者であっても、オーストリア軍に勤務していることを誇りに思っていた。オーストリアの偉大な詩人グリルパルツァー **Franz Grillparzer** は、オーストリア軍こそが全てのオーストリア人にとって故郷のようなものと語っているが、グリルパルツァーにとってオーストリアは専制国家ではなかった。何故なら彼はロシアの専制を非難しており、オーストリアが自由のためにロシアの専制を倒すと約束していたからである。

オーストリア帝国内に存在していた様々な政体から判ることは、オーストリアには千年に渡るヨーロッパの歴史が凝縮・沈殿しており、しかもその全てが一つに纏まっていたことである。ヨーロッパ各国の歴史には、発展段階の異なる文明が一貫性のない形で入り込んで来ているものだが、オーストリアは他の国と違って特殊であった。オーストリア以外の国には、強引に1つの原則に合わせようとするところがあった。1つの原則だけが重視され、他の原則は排除される傾向が強かったのである。ふつう国家や民族の境界線は、「海に対する支配権 **dominium maris**」・「自然な国境線 **natural frontiers**」・「神が国王に与えた境界線 **the divine right of kings**」などと言った原則に従って決められたりするが、オーストリアでは違っていた。そこにはヨーロッパ文明の伝統が全て揃っていたのである。東の国境がトルコ軍によって脅かされていた時オーストリアは、信仰の守護者であった神聖ローマ帝国の伝統に忠実にトルコの進撃を阻止していた。ヨーロッパの他の国と違って、オーストリアにはヨーロッパの伝統が「完璧な形 **completeness**」で存在していた。それは「確立された完璧さ **completeness by establishment**」であった。ヨーロッパ史の全ての局面を一国の内部に保持して来たこと、これがオーストリアの特徴であった。シュレーゲルがオーストリア人であったことの意味もそこにある。

このオーストリアの独特な在り方は、ドイツ・ハンガリー・チェコといった帝国を構成していた民族の在り方とは別物であった。帝国の構成民族に視点を限定してオーストリアの存在理由を説明するのは、不可能である。オーストリアの国境線は外部から押し付けられたもので、何か必然性に従って形成された訳ではない。オーストリアはオーストリア以上の何か、つまり「キリスト教の伝統 **the heritage of Christianity**」を代表していたのである。構成民族が脅かしていた帝国としての一体性を守るべく、耐えに耐えて来たのがオーストリアであった。構成民族が、帝国としての一体性なしでやっていると誤解して独立を目指していた時、柔軟な対応で一体性の維持に成功していた。新しい制度の導入もあったが、古い「移動テントの宮殿 **Kaiserliche Hoflager**」も残されていた（かつて皇帝は軍隊と廷臣たちを率いて、帝国内を移動して統治を行っていた。「移動テントの宮殿」はその名残である）。その最後の担当大臣 **Minister am kaiserlichen Hoflager** が、ハンガリー貴族出身のモンテヌオボ侯爵 **Alfred Fürst von Montenuovo** であった。そのことから、統治にハンガリー貴族の協力が欠かせなかったことがよく判る。

帝国の構成民族は帝国の一体性を維持するため、民族の独自性を犠牲にすることを求められていた。つまり「キリスト教の砦 **the bulwark of Christianity**」であったオーストリアは、お互いに矛盾する要求の上に成り立っていたのである。一方で帝国は構成民族に画一性を強制することはせず、独自性の維持を認める寛容さを示していた。しかし他方で、ヨーロッパ中の国々が十字軍に対するような称賛の声をオーストリアにも降り注ぐよう求めていた。そこで犠牲を払わされたのが帝国内のスラブ民族であった。

第一次世界大戦でスラブ民族は一時期、独立を達成することに成功した。しかし、ユーゴスラビア・チェコスロバキア・リトアニア・ハンガリーの4カ国は（リトアニア・ハンガリーはスラブ民族でない）、

長い独立の歴史を持つ他のヨーロッパ諸国の中では新参者であった。この4カ国の独立の意味を過大に評価すべきではない。オーストリアに600年間も帰属していた歴史的な事実が、ほんの15年の独立の経験で消え去ることなど有り得ないからである。第一次世界大戦後に独立したこの4カ国は、百年前のザクセン侯国やバイエルン侯国と似ていた。つまり再びヨーロッパに統合されることが期待されていたのである(事実、再統合は実現している)。どの国も戦争を始めることなど考えていないはずである。複雑な国内事情が許すはずがないし、国内に抱え込んだ少数民族がそれを許すはずがない。また常態化した戒厳令の施行が、それを許すはずもない。もし戦争をすることになれば、国民すべてを兵士にしなければならなくなる。しかし平和なら、兵士の数は半分で済む。戦争など望むはずがない。

近代の幕開け(ルターの宗教改革)の時、中央ヨーロッパは「帝国 Reich」と「民族 Nation」に分かれていた。当初帝国に属していたのは、オーステンド Ostend・アントワープ Antwerp・ブラッセル Brussels から、リエージュ Liège・シュトラスブール Strassburg・ボーデン湖 Bodensee・アールバーグ峠 Arlberg Pass・チロール地方 the Tyrol・シュタイアーマルク州 Steiermark (オーストリア)・ケルンテン州 Kärnten (オーストリア)・スラボニア地方 Slavonia (クロアチア) までであった。また、ベルリンから列車で2時間の距離にあるシュエボージン Swiebodzin (ポーランド)も帝国領であった。皇帝の「相続領 Erblande」に取り囲まれていた中心部には数多くの領邦国家が存在し、そこは「領邦君主 Landesherr, High Magistrate」によって統治されていた。その様子はカーライル Thomas Carlyle の『衣装哲学 Sartor Resartus (仕立て直された仕立屋)』やゴビノー Joseph-Arthur Comte de Gabineau の『プレイヤー La Pléiade』、ロマン・ロラン Roman Rolland の『ジャン・クリストフ Jean-Christophe』などに描かれている通りである。「領邦君主」たちは皇帝の領地によって守られていたのである。

以上が400年前のヨーロッパが置かれていた状況であった。1938年にヨーロッパが置かれている状況は、ルターが生きていた頃とは真逆に成っている。つまり数多くあった「領邦国家」は1つの「帝国」に纏められ、1人の「リーダー Realm leader」の命令に服する形になっている。また、かつて存在していたバイエルン侯国・ザクセン侯国・帝国都市は消滅して、その周辺に多くの「民族」が存在することになった。フィンランド・ラトビア・エストニア・リトアニア・ポーランド・チェコスロバキア・ハンガリー・ルーマニア・ユーゴスラビア・リヒテンシュタイン・スイス・フランス(ドイツとフランスが領有を争った地域で、第一次世界大戦後はドイツ領からフランス領になった地域)・ルクセンブルク・オランダ・ベルギー・デンマークである。

新しく登場して来た状況も、以前と同様に複雑である。しかも問題は何も解決されていない。しかし、新しい動きは見られる。つまりドナウ川沿いの国々とフランス・イギリス・ドイツに囲まれた西ヨーロッパの国々は、パリを中心にしたコスモポリタンな世界(民族の違いを問題にしない)に存在している訳ではない。アンリ4世やリシュリュー時代のフランスがヨーロッパの中心部で演じていた役割は、いまやイタリアが演じる様に成っている。1938年まで親ドイツ的であったハンガリーとユーゴスラビアの動きを抑えて、オーストリアの独立を保障していたのはイタリアであった。

しかもこうした外交問題の発生ですら、オーストリアとハンガリーの伝統的な絆を壊すことは無かった。何故ならオーストリアと言う「国際的な国家」は、国際結婚によって成り立っていたからである。いま国際関係と言うと、通商関係・条約締結・国際会議を思い浮かべることが多いが、もともと国際関係は通婚によって成立していたのである。婚姻関係の成立こそが新しい民族形成の出発点だった。アブラハムの知恵は正しかったし、いまも正しい(『旧約聖書』の「創世記」に出てくる話で、アブラハムは妻のサラと共に長く息子の誕生を待ち受け、やっと生まれて来た息子の婚姻によってユダヤ民族が登場して来ることになった)。マキャベッリの『君主論 Principe』とは違ったタイプの君主が、オーストリ

アの君主たちであった。「他の国が戦争していても、オーストリアは戦争せずに婚姻関係を結ぶ Let others wage war; thou, happy Austria, shalt marry」とはオーストリアの格言である。それは皇帝だけでなく、皇帝の統治下にあった全ての臣民がそうであった。将校・地主・実業家・土木技師・職人・外交官・役人・行商人たち全員が、国際的な通婚関係にあった。オーストリア＝ハンガリー帝国内の民族は、その全てがオーストリア人だったのである。ザグレブ（クロアチア）・リュブリアナ（スロベニア）・ブダペスト（ハンガリー）・クラクフ（ポーランド）・プラハ（チェコ）は、その全てがオーストリアの都市であった。

オーストリアに特徴的だったのは婚姻関係の在り方で、個々の民族の視点からすれば「族外結婚 outbreeding」であっても、オーストリア＝ハンガリー帝国の視点からすれば「族内結婚 inbreeding」であった。そこで他の国では見られなかったような資質が生まれて来ることになった。誰もが2カ国語を使用し、民族的な特性の変質・変化・変態が伝統と成っていた。夫の「所属民族 official nation」が、妻から影響を受けずに済むことは無かったからである。

両親と別れた娘は、夫の家庭に「進化 evolution」を齎す。新しい生活様式・習慣と慣習・価値観・伝統を持ち込んで来るのである。「進化」という言葉は使い古され誤用されている嫌いがあるが、その意味するところは30-40年の結婚生活の中で、娘の父親の家から子供に伝えられる遺産の展開ということである。最近になって離婚が増えている理由も、これで説明できる。娘と父親の関係が希薄に成っており、父親は数年すると娘に対する関心を失ってしまう。また娘が実家で学んできたことに、夫は関心を示さなくなる。

夫は結婚の日とか新婚旅行の時に、本当の意味で「夫」に成る訳ではない。つまり夫が結婚する相手は、一人の女性以上の存在なのである。結婚によって、彼女は自分の一族の長い歴史を夫のもとに持って来るのである。もし人間に男性しか存在しなかったら、違った民族や人種が融合することは有り得ない。頑固さと闘争心で一杯の粗野な男どもにとって、自分と違った人種の男に近寄ることなど不可能である。しかし妻であれば、自分の一族の遺産を夫のもとに根付かせることができる。夫の生き方を変えるためには生涯を費やす必要があるが、それこそが女性が果たす大きな役割であり、女性自身も気づいていない秘密の力なのである。彼女の微笑みよりも大切なのがこの秘密の力であり、彼女の微笑みはこの秘密の力を隠すためのカーテンに過ぎない。近年の「女性解放運動 feminism」は、表面的なことしか問題にしていない。まるで『不思議の国のアリス』に登場して来る「チェシャ猫の笑い the famous grin of the Cheshire cat」や、謎かけを忘れたスフィンクスのようなものである（「無用の長物」の意）。単調な機械音の繰り返しが聞こえるだけの近年の世界では、「娘であること daughterhood」が持つ重要な意味が忘れ去られようとしている。男性が本当の意味の父親・年長者 elder・家長 patriarch で無くなって行くのに合わせて、大切にされるのは「少女・花嫁・既婚女性・母親であること girlhood, bridehood, womanhood, motherhood」であっても、「娘であること」ではない。

オーストリアの詩人ウイルトガンス Anton Wildgans はオーストリア人について次の様なことを言っていた。「我々はよくフェニキア人と似ていると言われるが、我々が似ているのはフェニキア島の王女ナウシカであろう。外国出身の異邦人オデュセウスは、逆風に流されて島浜にたどり着くが、そこに神に導かれてナウシカがやって来るのである」。ナウシカとオデュセウスは、「汝、幸運なオーストリアよ、結婚すべし tu, felix Austria, nube」という格言の象徴である。

オーストリアの歴史をよく象徴しているのが、父帝から広大な帝国を相続した「娘・相続人 Erbtochter」のマリア＝テレジア Maria Theresia である。40年に及ぶ統治の間に、神聖ローマ帝国を世俗国家オーストリア帝国に変えていた。女性であったがために皇帝に成れなかったが、ハプスブルク王朝を維持

して帝国を構成する諸民族をよく1つに纏めていた。「国事詔書 Pragmatische Sanktion」で女性による相続を認めていたにも拘らず、ヨーロッパ諸国はマリア＝テレジアの帝位継承に異議を唱えて戦争を仕掛け（オーストリア継承戦争）、マリア＝テレジアはハンガリー貴族の支援を得て危機を乗り切ることになる（その代わりに、聖王イーシュトバーン以来、彼らが持っていた特権を認める）。その後200年の間、オーストリアはハンガリー貴族の影響下に置かれることになった。

700万人のハンガリー貴族は、2000万人のハンガリー人を完全にその支配下に置くとともに、4600万人のオーストリア帝国もその影響下に置いたのである。しかも払っていた税金は、オーストリア全体の30%に過ぎなかった。1914年に「オーストリア＝ハンガリー帝国」と呼ばれていたが、むしろ「ハンガリー＝オーストリア帝国」と呼ばれるべきであった。帝国を支配していたのはハンガリー貴族だったからである。マリア＝テレジアとその後継者が、神聖ローマ帝国をオーストリア帝国に作り替えるために払った代価がこれであった。ハンガリー人を他の構成民族と同じように遇することが何度か試みられたが、全て失敗している。このハンガリー人に有利だった変化は、一種の革命と呼ぶことができる。狡猾で油断ならない周辺国が、女帝に強いた体制が招いた結果であった。この革命もまた、1805－1813年に他の革命と同様「屈辱humiliation」を経験している。この時期のオーストリアは、かつてのオーストリアとは違っていた。単に神聖ローマ帝国がオーストリア帝国に変わっただけではなかった。18世紀のオーストリアは、かつてオーストリアが持っていたヨーロッパの一体性を維持する柔軟な「政体body politic」でなく、単なる世俗国家の集合体に過ぎないことが女帝の登場を契機に明らかに成ったのである。

既に見てきたように、シュレーゲルたちがオーストリアと運命を共にすることにしたのは、ハンガリーに依存していてもオーストリアが「完璧さ completeness」と「全体性 totality」を失わずに居ると考えたからであった。つまり女帝マリア＝テレジアの果たすべき役割は、まだ失われていないと考えたのである。「ウィーンの華Wiener Charme」と呼ばれたマリア＝テレジアは、オーストリアに代わって誰もが理解できる言葉で話し始めた。それが音楽であった。ハイドン、モーツァルト、ベートーベン、ブルックナー、フランツ・フォン・リスト、ヨハン・シュトラウス、マーラーたちがオーストリアの庭を潤すことに成ったのである。1886年にハンスリック Eduard Hanslick は、次のようなことを書いていた。「音楽の世界を支配することで、ウィーンはオーストリアの首都以上のものとなった。ウィーンそのものが強力な帝国と成ったのである。この帝国は、主権を国境線を超えた所にまで及ぼしていた。スラブの音、ハンガリーの音、イタリアのメロディーが力強いドイツの音楽にブレンドされていた。人種の混交に成功していたように、音楽の混交にも成功していた」。

オーストリアのカトリック信仰と「婚姻政策 daughterhood」の重視は、宗教改革が生み出したプロテスタントの「父性崇拜 paternalism」と対照的であった。受け入れ、耐え忍び、自制して我慢する姿勢は「諸民族の融合 spiritual sublimation」を可能にし、そのおかげでオーストリアは生き残ることができた。「適者生存 the survival of the fittest」と言うが、その「適者」とは何者なのか。この考え方をオーストリアに当て嵌めてみると、答えはこうである。つまり生き物は、その潜在能力を発揮すれば「適者」と成ることができるということである。外国にとって、オーストリアは相矛盾する政治原理を抱え込んだ非論理的・絶望的な、救いようのない国に思えた。しかし都市を守るのは所詮、都市壁などではなく人間である。オーストリアは新しいタイプの人間を生み出すことで、自らの弱点を補っていたのである。

以上の説明で、第一次世界大戦後に小国に成ってしまったオーストリアをドイツ語圏の一部と考える訳にはいかないことが理解できたと思う。国語の問題は「自国中心主義者 nationalist」が考えているほ

ど単純ではない。国語は数百万人もの人間を包むためのセロファン紙などでは無いのである。国語とは、心の奥底から湧き上がって来る衝動の様なものである。そんな人間の要求に答えられないような国語は、無用の長物である。「自国民中心主義 nationalism」は、人間の要求に沿えるような国語を駄目にするのであり、国語を政治プロパガンダの手段に貶めるものである。国語は衰退して行き、たとえ千年間生き延びるにしても、化石でしかなくなる。同じ言葉を使いながら、お互いに理解不能に成って行くことになる。他方で、グローバル化の進展によって民族・階級・職業の違いは小さく成って行くはずである。第一次世界大戦後にハプスブルク帝国を解体して得意になっていた戦勝国は、国語に関する限り大きな過ちを犯したことを知るべきである。オーストリアは、偉大な忍耐・公平さ・変わらぬ重要力によって多様性の中の統一を実現していた偉大な国家であった。

読者は最近のニュースに惑わされないようにして頂きたい。1938年のヒトラーによるオーストリア併合は、実は本来のオーストリアの併合は意味しない。ヒトラーは世界が戦後の破局に直面したとき、洪水の中に漂うドイツ系オーストリア人を釣り上げただけなのである。ドイツ系オーストリア人は、この章で論じたオーストリア人の1/6を占めているに過ぎない。ヨーロッパの娘ナウシカであったオーストリアは第一次世界大戦で失われてしまったが、かならずや再生を果たすに違いない。